

金時鐘の「生理の言語」と「在所」

——『猪飼野詩集』(1978) から「献詩」(2022) へ——

岡崎享子

I はじめに

2022年5月、在日朝鮮人¹⁾一世の詩人である金時鐘(1929～)²⁾の作品「献詩」が刻まれた「共生の碑」が大阪市生野区にある御幸通商店街(以下、大阪コリアタウン)に設立予定の大阪コリアタウン歴史資料館の前に建立された。これは、初めての金時鐘の詩碑であり、一般社団法人大阪コリアタウンから金時鐘に「共生の碑」に寄せた作品を書いてほしいと依頼したことが背景にある。2022年5月14日には「共生の碑」の除幕式が執り行われ、「献詩」は初めて公の場で発表された。「献詩」は、第4連42行で構成される作品であり、2022年7月現在、金時鐘の最新作である。「献詩」には、在日朝鮮人が作り上げた集落である「猪飼野」の昔の姿から現在に至るまでの観光客で賑わう大阪コリアタウンの姿、未来に向けた人々の「共生」の願いが描かれている。

金時鐘と「猪飼野」は、切っても切り離すことができない程深い関係を持っている。金時鐘が1949年6月に済州島から渡日し、最初に生活を始めたのが「猪飼野」であり、「猪飼野」は、その後も長年の間、彼の生活の拠点となった地である。金時鐘は、これまでに何度も「猪飼野」の町を作品のテーマや背景として描いてきた。1978年には、「猪飼野」で生活する当時の在日朝鮮人の様子を描いた第4詩集『猪飼野詩集』³⁾を発表した。

『猪飼野詩集』と「献詩」のテーマが、「猪飼野」であることはもちろんのこと、「生理の言語」が体现されているという点においても共通している。「生理の言語」とは、金時鐘が自身の使用言語の一つとして言及する言語である。金時鐘によると、「生理の言語」とは、「辞典を操って分かるような代物ではない。暮らしの伝承を共通して持ち合わせている者同士がひびき合う、あの体ごとの了解」を意味する⁴⁾。実際に、『猪飼野詩集』には、在日朝鮮人の人々の中の会話や生活風景が描かれており、「献詩」には、「猪飼野」の在日朝鮮人の言語空間に「生理の言語」が存在するということが説明されている。

金時鐘は、度々「生理の言語」について言及し、「生理の言語」にまつわるエピソードをエッセー等の散文に書いている。金時鐘にとって、「生理の言語」がいかに重要なのかを考える際に参考にしたいのが、『旅する日本語』における中川成美、西成彦の対談である。対談では、同書のテーマである「外地文学」の性格を「日本語自体が膨張したり縮小したりしながら国境を越え境界を越え、さまざまな所に侵犯と融合を繰り返しながら文学を生成していく」ことと説明している⁵⁾。この「外地文学」の性格は、在日朝鮮人の文学者、とりわけ金時鐘の文学にも当てはまる。金時鐘の場合、意識的にも無意識的にも日本語を変形させ、日本語でない「日本語」を創造しながら文学活動を行っているといえる。その際の鍵となるのが「生理の言語」や幼い頃に身に

付けた朝鮮語であると考えられる。

しかしながら、「生理の言語」や朝鮮語の側面については、具体的に論じた研究は不十分である。現在に至るまで、金時鐘の使用言語に関する研究は数多くなされてきたが、金時鐘が言及する「日本語」や「在日朝鮮人としての日本語」を中心に論じられることが多い。その内容は、彼が植民地期に培った日本語を「報復」の対象として打ち砕き、日本語の幅を広げることを文学活動で実践しているというものである⁶⁾。

本稿では、このような研究動向を踏まえた上で、金時鐘が持ち得る言語である「生理の言語」や朝鮮語の側面について焦点を当てる必要があることを提起したい。本稿の第Ⅱ章では、金時鐘の言語観を大きな枠組みから概観した上で、「生理の言語」がどのような「言語」であるのかについて考察する。第Ⅲ章では、金時鐘が「献詩」の作中において、どのように「生理の言語」について言及したのかについても探る。さらに第Ⅳ章では、金時鐘が「献詩」の中で、「生理の言語」について言及する際、故郷の意を表す「在所」という言葉を使用した点に着目し、金時鐘がなぜ「在所」という言葉を選んだのか、次いでは「在所」に込められた意味を考える。これらを具体的には「献詩」と『猪飼野詩集』(1978)の未刊詩である「チノギの船 果てる在日(5)」の作品分析から明らかにする。これら2つの作品には、猪飼野に住む人々の故郷に対する思いが描かれている。さらには、猪飼野から「運河」を通じて「在所」につながるという金時鐘の故郷観が表れている。とりわけ、「在所」は、朝鮮語との関わりのある言葉であると考えられるため、朝鮮語の側面から検討する。そして最後には、「生理の言語」と「在所」の関係性についても考えてみたい。

Ⅱ 金時鐘と言語

1 日本語との関係

金時鐘の言語観を考える際には、まずは彼の来歴と日本語との関係を押さえておかねばならない。彼は、1929年に植民地朝鮮の釜山で生まれ、日本の皇民化教育を受けたことから、日本語は彼の意識を支配する言語となった。

金時鐘は、渡日した翌年の1950年に、日本共産党の組織下にある在日朝鮮人連盟の下で朝鮮学校の復興活動を始めとする在日朝鮮人の組織活動を行った。それと同時並行に文筆活動も徐々に行い、特に、1953年から1959年に至るまで組織の文化政策の名目で発刊された文学雑誌『ヂングレ』では、数多くの詩や論評を発表した。しかし、1955年に従来の組織(1945～1949年在日朝鮮人連盟、1951～1955年在日朝鮮統一民主戦線)が在日本朝鮮人総聯合会に改められ、朝鮮民主主義人民共和国(以下、共和国)の影響を大きく受けることになった。それにより、共和国の政治体制が組織に反映され、文学活動においても共和国のプロパガンダを意識せざるを得なくなると同時に、朝鮮語による執筆を掲げる方針がとられた⁷⁾。つまり、共和国や組織の側から朝鮮語で書くことが求められたのであった。

そのような要求に対し、金時鐘は、組織から批判を受けながらも、むしろ日本語で書くことの意義を主張し、第1詩集『地平線』(1955)、第2詩集『日本風土記』(1957)を発表した。しかし、1959年に『ヂングレ』は廃刊、金時鐘は、組織と対立したことにより1950年代末頃から

1970年に至るまで文学活動を行えない状況に陥った。金時鐘が再び文学活動を再開できるようになったのは、第3詩集『新渴』(1970)の発刊後の1970年以降になってからのことであった。このように、金時鐘は、日本語で書くことにこだわり続けたのである。しかし、その日本語は朝鮮語を母語とする在日朝鮮人一世が使用する「日本語」であったという点は留意しなければならない。金時鐘が日本語の使用を主張すればするほど、彼の朝鮮人としてのアイデンティティは引き裂かれる状況であったことは想像に難くない。

当時の金時鐘の言語化に対する考えがよくあらわれているエッセーとして、1957年に発刊された『ゼンダレ』18号の「盲と蛇の押し問答」⁸⁾があげられる。共和国から朝鮮語による文学活動を強いられ、日本語で書くこと自体が朝鮮人としての民族性を疑われる状況の中で、金時鐘は「朝鮮の詩らしい詩は一向に書けませんでした」と言及した⁹⁾。さらに、自身が朝鮮人としてのアイデンティティと詩を朝鮮語で書くことについて、「私は在日という副詞をもつた朝鮮人です…中略…私は、国語を意識的に朝鮮語であると云い聞かせることによつて朝鮮語が国語になつていきます」と述べた¹⁰⁾。これらの金時鐘の発言からは、日本語を使用する朝鮮人としての朝鮮と日本の間で揺れ動く心境が読み取れる。言い換えると、この頃の金時鐘の言語の葛藤が、その後の朝鮮語とも日本語とも言い切れない言語、つまりは「生理の言語」や「在日朝鮮人語としての日本語」という彼独自の言語を作り出す発露になったといえる。

また、金時鐘の言語とアイデンティティの揺れは、彼自身の日本語の捉え方にもあらわれている。金時鐘は、日本語に対する考えに関して以下のように言及している。

よんどろこなく来た日本での暮らしではありましたが、詩を書くことにそれでも執着するとすれば、いやがおうでも恨み多い日本語を“日本”へ向けて生きるしかなく、それはそのまま私という人間の下地を敷きつめた自分の日本語への私の報復ともならねばならないものでもありました¹¹⁾。

金時鐘にとって日本語とは「恨」¹²⁾の対象であり、「恨み多い日本語」と向き合いながら詩を書くということが「日本語への私の報復」になるのである。「恨み多い日本語」とは、金時鐘が植民地下において皇国少年期に使用していた日本語と考えられる。このように、金時鐘は「日本語の報復」を成し遂げるという明確な目的意識を持ちながら詩を書き続け、その過程の中で日本語ではない「日本語」を創り出したのだ。

2 言語観の概要

それでは、「生理の言語」や「在日朝鮮人語としての日本語」とは一体どのような言語であるのだろうか。本稿では、金時鐘の使用言語を大きく4つに分類する。それはすなわち、朝鮮語、日本語、「生理の言語」、「在日朝鮮人としての日本語」である。

金時鐘にとって日本語とは、前述したように、植民地朝鮮の下で皇民化教育を受けたことにより植えつけられた言語であった。その後の朝鮮の植民地解放を経て、彼が朝鮮人としてのアイデンティティを探し出そうと新たに学び始めたのが書き言葉としての朝鮮語であった。しかし、彼は植えつけられた日本語から抜け出せず、日本語に「報復」する意図を持ちながら日本

語で詩を書き続ける。その中でも、金時鐘の言語観の根底にあるのは幼少期から皮膚感覚を通して身に付いた言語が彼自身も言及している「生理の言語」であり、それは幼少期に父母や周囲の人々から受け継いだ言葉、さらには言葉では表すことのできない言語までも含む。そして最後の「在日朝鮮人語としての日本語」とは、金時鐘が奪われた朝鮮語を取り戻し、植えつけられた日本語を解体していく過程で意識的に創造された日本語とは言い切ることができない「日本語」である。金時鐘は、「在日朝鮮人語としての日本語」について、以下のように言及している。

自分の言葉とは何かを必死で考えるようになりました。ぼくは「在日朝鮮人語としての日本語」という言い方をしています。在日の古い世代の使っているのは「日本語」ではないんです。「在日朝鮮人語」としての日本語なんです¹³⁾。

このように、金時鐘は、在日朝鮮人の「古い世代」が使用している言語を「在日朝鮮人語としての日本語」と言及している。この「在日朝鮮人語としての日本語」と深く関連するのが、「生理の言語」である。浅見洋子は、「生理の言語」を在日朝鮮人の生活感覚に根ざした言葉であり、世代を継いで異郷で暮らしてきた在日朝鮮人の苦い笑いや悲愁が抱えられた言葉であると述べ、日本語にも朝鮮語にもない「喩」を創り出せる可能性をもっていると言及している¹⁴⁾。浅見が指摘するように、「生理の言語」は「在日朝鮮人語としての日本語」の下地となる、日本語でも朝鮮語でもない言語であると解釈できる。むしろ、その特異性が、在日朝鮮人としての独自の言語表現を可能にさせるのである。次に、「生理の言語」がいかなる言語であるのかについて、もう少し詳しくみてみる。

3 「生理の言語」に関する言及

金時鐘が言及する「生理の言語」は、大きく2つに分けられる。1つ目は、金時鐘の個人的な体験にもとづく「生理の言語」である。金時鐘は、皇国少年であった自身を朝鮮人として蘇らせたのは、自身の父親が幼少期に唄っていた朝鮮語版の「クレメンタインの歌」であったと言及し¹⁵⁾、この歌を「生理の言葉」とであると位置付けている¹⁶⁾。細見和之は、「クレメンタインの歌」について、祖父から孫にいたる三代の思いに関わる歌であると述べている¹⁷⁾。この言及は、「あの歌は私の父親が自分の父の父親、つまり私の祖父にむけて歌っていた歌かもしれないとも思えてね」という金時鐘の証言にもとづいている¹⁸⁾。

2つ目は、在日朝鮮人が共有し得る「生理の言語」であり、「献詩」に書かれている「生理の言語」は、これに当たる。金時鐘は、「生理の言語」について、以下のように言及している。

「生理言語」とでも言うべきものの息づきがある。もちろん辞典を操って分かるような代物ではない。暮らしの伝承を共通して持ち合わせている者同士がひびき合う、あの体ごとの了解のようなもののことだ。この関係のさ中にあるのは、ちょっとした言葉のきれはしでさえ特定の意味を描きだすことがあり、知らないはずの言葉までが、時として丸ごと通じてしまうことだって珍しくない。在日朝鮮人の語らいの多くは、このようにして蔵されている生理

の中の言葉のような気がするのである¹⁹⁾。

このように、金時鐘は「生理の言語」を言語として意識的に教わるものではなく、知らぬ間に身についている「暮らしの伝承を共通して持ち合わせている者同士」で成立する「体ごとの了解」であると述べている。

「生理の言語」は、金時鐘以外の在日朝鮮人文学者によっても度々言及されている。例えば、在日朝鮮人作家の元秀一は、「猪飼野」をテーマとした作品を創作する際、「僕の前風景にちらちらと見え隠れする済州島の女が持つさながらアリランのような「生理」があった。僕はこの「生理」の赴くままに猪飼野を書けばよかった」と述べている²⁰⁾。元秀一も述べる「生理」とは、どのようなものであろうか。金時鐘は、「生理の言語」で語られる「こぼれ話」として、「漬物」と聞いてキムチの酸っぱさを思い浮かべることや、「フトン」を「ウドン」と間違え、夜通し「ウドン」を所望し続けた話などを例にあげながら、以下のように述べている。

この手の話は「在日」の暮らしのなかにずいぶんとあるのだが、話の妙味が日、朝両語の、それも土着臭の強い地方語との兼ね合いのなかで醸されるものだけに、新しい世代たちが主座を占めるようになった今日の在日の実情からは、ますます遠のいてゆく受け手のないこぼれ話だ。それは日本語の領域での、在日朝鮮人語としての「日本語」の限界を差し出しているものである。いかに日本語を磨こうと、日本語の領域での日本語だけでは、とうてい記録にさえなりにくい未形の伝承なのだ。…中略…共感の下地を共有するという点では、在日朝鮮人の可能性として生理言語といったものが考えられる²¹⁾。

ここから分かるように、「生理の言語」とは、「日、朝両語の、それも土着臭の強い地方語との兼ね合いのなかで醸される」言語である。また、金時鐘は、「生理の言語」とは、在日朝鮮人同士の「共感の下地を共有する」特性を持つことを指摘しながら、今日の新しい世代の人々には「生理言語」が通じない状況になりつつあると吐露している。つまり、1990年代後半の時点で、金時鐘が「生理の言語」で語られる「こぼれ話」が新しい時代には、次第に通じなくなっている状況について、危惧していたことが伺える。そのことを踏まえながら、「献詩」における「生理の言語」の描かれ方についてみていく。

Ⅲ 「生理の言語」からみる言語観

1 「献詩」における「生理の言語」の描かれ方

2022年に発表された「献詩」において、「生理の言語」はどのように描かれているのだろうか。「献詩」の全文は、以下(表1)の通りである。

表1 金時鐘「献詩」(2022)全文

<p>金時鐘「献詩」(2022)</p> <p>人が住みついた当初から／猪飼野は居ながらにして迷路であった。／あぶくをまたいで橋が延び／対岸を見すえて街が切れていた。／そこではその地の習わしすらも／持ちきたったくにでの遺習に追いやられ／日本語ともつかぬ日本語が声高に幅を利かせて／通りにまで異様な臭気をはびこらせ／得体の知れない食べ物が／おおびらにまかなわれてにぎにぎしかった。</p> <p>風紋もよじれず 蟹も這わず／澱んでも運河は下水を集めて川であり／異郷でくすんでゆく／年古りた家郷の実在であった。／どこでどう河口が会おう海なのかは誰も知らず／けんめいに集落が水路のへりでひしめいていたのだ。</p> <p>文化とやらはもともと独自のものだ。／三度のめしも欠かせぬおしんこも／はては祭祀のしきたりまでも／在所でなじんだ風俗がそのまま／遠い日本でのゆるがぬ基準になっていて／生きるよすがの意地のように／在日の先代たちはこだわって生きた。／そのかたくなな執着が／物言わぬ生理の言語ともなって受け継がれ／代を継いだ世代たちの／心の奥の語りともなって今に至った。／意固地なまでの在日の伝承があったればこそ／焼肉もキムチも誰もが好む／日本じゅうの豊かな食べ物に成りもした。</p> <p>周りはみながみな／つっけんどんなチョウセンジン。／そのただ中で店を張り／共に耐えて暮らしを分かち／いよいよコリアタウンの日本人とはなった／いとし「隣の従兄弟」たち。／やはり流れは広がる海に至るものだ。／日本の果てのコリアンの町に／列をなして訪れる日本の若者たちがいる。／小さい流れも合わさっていけば本流さ。／文化を持ち寄る人人の道が／今に大きく拓かれてくる。</p> <p>二〇二二年四月九日 (老生) 風人 金時鐘</p>

「献詩」には、在日朝鮮人の立場から、「猪飼野」の過去から現在に至るまでの様子と未来への展望が描かれており、大きなテーマとして、「在日」や「チョウセンジン」と「日本人」の「共生」が掲げられている。第3連では、「生理の言語」について言及している。そこには、在日朝鮮人の「先人」が「在所でなじんだ」「おしんこ」や「祭祀」のような「在所でなじんだ風俗」が、言語化できない「物言わぬ生理の言語」として受け継がれ、「心の奥の語り」となったことが書かれている。この「おしんこ」は、キムチを表し、「祭祀」は朝鮮半島式のチュサ（法事）を表していると推測できる²²⁾。第3連の最後には、かつては在日朝鮮人のみで「伝承」された「キムチ」や「焼肉」文化が、今では日本の食文化として受け入れられるようになったという内容で締め括られている。

このように、金時鐘が「献詩」の作中で「生理の言語」についての説明を行なったということは、本作品における大きな特徴の一つである。なぜなら、金時鐘は、これまで「生理の言語」についてエッセー等の散文で言及することはあっても、作中で説明することはなかったからである。その背景には、「生理の言語」の存在を今一度確認し、その存在意義を再確認するという意図があったと考えられる。第Ⅱ章で述べたように、金時鐘は新しい世代の在日朝鮮人には「生理の言語」が通じなくなっていることを危惧していた。そのことから分かるように、金時鐘は、在日朝鮮人一世の立場から、「生理の言語」を共有していた一員として、いずれ無くなってしまうかもしれない「言語」を、今に生きる人々や後世の人々に伝える必要を感じたのでは

ないだろうか。金時鐘が「生理の言語」の存在を伝えようとする心境は、次のインタビューの内容から見受けられる。

2 インタビューで語られる「生理の言語」

「共生の碑」の除幕式に先立ち、筆者は、2022年4月20日に金時鐘宅にて、金時鐘本人から「献詩」に関する話を伺う機会を得た。そこには、毎日新聞社の高尾具成記者も同席し、話しの内容の一部は、2022年5月13日『毎日新聞』夕刊の「特集ワイド：93歳金時鐘さん 大阪コリアタウンに献詩 異郷の在日、共生の本流願い 文化耕した知恵、先人への敬慕」²³⁾として紹介された。そこで、ここでは当日のインタビュー内容と高尾具成記者の記事を参考にしながら、金時鐘が語る「生理の言語」について検討する。

前節において、「生理の言語」を成り立たせるものは、在日朝鮮人が日本で実践しながら受け継いできた「在所でなじんだ風俗」とであると言及した。これに関連して、金時鐘本人は、具体的なエピソードを出しながら、「生理の言語」が持つ3つの性格について述べた。その1つ目は悲しみを散らすこと、2つ目は比喩表現であること、3つ目は「民族」や「同胞」の間で引き継がれるものであるということである。次に、これら3つの観点に基づきながらインタビューの内容について詳しくみていく。

(1) 悲しみを散らす

金時鐘は、「生理の言語」について説明する際、「生理の言語」と在日朝鮮人による冠婚葬祭等の「風俗」を例に説明をした。これに関し、高尾記者は、記事の中で以下のようにまとめている。

(筆者追記：金時鐘は) 辛苦に満ちた過去を振り返りながらも、「異郷」でもついえなかった風習をいとおしく感じてきた。金さんは、朝鮮半島を「うちの国」と言い、文化をつないできた先人たちのかたくなさをたたえる。一例として、悲しみを散らすようににぎやかな葬儀や法事を挙げる。ひそひそ話はいけないという礼儀や風習があるから、声高で粗野になる。出身地によってお供えもののあげ方が違うから、魚の頭を左にするか下にするかで年寄り同士が大騒動になる。「そんな様子を見つめながら、日本の人たちはへきえきとしとるやろうから、改めなあいけんのになあと思いつながら、じわーとまぶたが潤むんだよね。なけなしで日本にきたから、風習こそが金科玉条やねん。はいずって生きる中で、国の思い出というのは揺るがぬもんになってな」²⁴⁾

ここで注目すべきは、「悲しみを散らす」という金時鐘から発せられた言葉である。上記の記事には書かれていないが、金時鐘は「悲しみを散らす」ことの例として、在日朝鮮人の葬式の一場面について述べた。葬式の時、亡くなった夫の妻が泣き叫び、線香一つをあげた後すぐに来客の食事の用意をしなければならず、悲しむ暇もなかった時に一人のおばさんがその妻に向かって冗談を言い、そこにいた人々の中で笑いがどっと起こるという話であった。金時鐘は、「うちの国では、悲しみを一人で抱え込ませない」と述べた。このように、金時鐘は、深刻な厳し

い状況の中でも笑いに変えることを「悲しみを散らす」と表現し、「悲しみを一人で抱え込ませない」在日朝鮮人同士のやりとりこそが「生理の言語」であると述べた。

(2) 比喩表現

続いて金時鐘は、「生理の言語」の例として、金時鐘は日本人と在日朝鮮人との赤ちゃんに対する「可愛い」という表現方法の違いについて話した。金時鐘によると、日本では可愛い赤ちゃんを見て「可愛い子やね」と言うが、「うちの国」では、赤ちゃんのほっぺたをつねりながら、「この出来損ないが!」と言うのだという。この表現は、日本における「目に入れても痛くない」と同じように、朝鮮では、「愛おしくてたまらない」という意味で使われるという。金時鐘は、「この出来損ないが!」という言葉が愛情の比喩表現であり、「かわいい」という言葉よりも優れた表現技法であると述べた。このような朝鮮の言い回しが、在日朝鮮人の生活空間においてもなお登場することが「生理」という現象であり、そこで紡がれる言葉が「生理の言語」であるのだ。

(3) 民族や同胞に引き継がれるもの

「献詩」では、カタカナで書かれている詩語がある。それは、「コリアン」、「コリアタウン」、「チョウセンジン」、「キムチ」である。その中でも、「キムチ」の「ム」が小さい文字で書かれていることに着目する。これに関し、高尾記者は、記事の中で以下のように書いている。

詩には象徴的な単語が出てくる。「キムチって書くとキムチ（気持ち）悪くなるでしょ」と、「ム」の字を小さくしたこだわりや誇りを冗談めかす。そして、在日社会に連なる継承の奥深さを強調する。世代を重ね、在日の中にも韓国語を話せない同胞も増えた。だが、言葉を超えた両親、祖父母のやりとりが身に染みついているという。「暮らしの伝承を持ち合わせている者同士、通じ合ってきた体ごと承された感覚があります。それを『生理言語』と表現したんです」²⁵⁾

「キムチ」は朝鮮語で「김치」(kim-chi) とハングル2文字で書き、読み方は「kim-chi」の2音節の単語である。従来、朝鮮語では「キムチ」の「ム」は、パッチムと呼ばれる子音であるため独立した音を持たない。金時鐘が「キムチ」の「ム」を小さい文字で表現したのは、在日朝鮮人社会で代々伝えられてきた話し言葉、つまり朝鮮語の「김치」(kim-chi) に近い方法で日本語表記することを試みたのだ。そして金時鐘は、「キムチ」のような在日朝鮮人の中で代々で伝えられた言葉を「生理の言語」と説明した。最後に金時鐘は、「生理の言語」の例をいくつかあげた後、「生理の言語」が行き交う「風俗」や「風習」を持ち得ることが「民族」であり、それを共有する人々が「同胞」であると話した。

以上のことを踏まえた上で、「生理の言語」の特徴を整理すると、「生理の言語」とは、言葉にできないもの、すなわち「同胞」の生活の雰囲気、「風俗」等の世代を超えて受け継がれるものということである。その一方で、ある状況に対する風刺や比喩等の言葉や会話のやりとりともいえる。それは、在日朝鮮人の人々が生きていく糧となるような言葉の表現である。それらの「生理の言語」に共通することは、「生理の言語」を話す者同士の関係性がより重要になると

いう点であり、「生理の言語」を共有する者の間で共通認識、共通理解を持てるかどうかが鍵となる。言葉を文字通りに理解するのではなく、生活習慣やある一定のルールで文字の背景や意図を理解することが求められているのである。

Ⅳ 「在所」からみる故郷観

1 故郷表現の多様化と「在所」

金時鐘は、1996年に渡日後初めて韓国を訪問し、その2年後の1998年には済州島を訪問した。そして、2000年に自身の済州4・3体験を告白し²⁶⁾、日本と済州島を行き来するようになった。このような2000年前後における動向は、金時鐘の故郷に対する考えに大きな影響を与えたと推測できる。なぜなら、金時鐘は文学活動を始めた1950年代から現在に至るまで、様々な形で故郷を描いてきたが、2000年以降、故郷の描き方がより多岐にわたっていることがみて取れるからである。

金時鐘が1950年代に発表した作品には、「故郷」、「祖国」、「母国」という言葉が多く用いられているが、1978年に発表された『猪飼野詩集』では、「家郷」が頻出する。さらに、2000年以降には、故郷を表す詩語はより多様化している。『失くした季節』(2010)では「在所」、「故里」が加わり、『背中地図』(2018)では、「ふるさと」、「郷土」、「住処^{すみか}」が新たに故郷を表す言葉として用いられるようになる。さらに、「故里^{ふるさと}」や「ふるさと」のように、表現方法も、漢字、平仮名、ルビを使うことによって視覚的、音の響きを駆使しながら故郷の表現方法の幅を広げようとしていることも確認できる。このように、金時鐘は2000年以降に故郷を様々な言葉で表現してきた。2022年に発表された「献詩」においても、「くに」、「異郷」、「家郷」、「在所」を用いていることが見受けられる。その中でも、「生理の言語」の言及の一部として出てくる「在所」という表現方法について具体的に考察する。

金時鐘が故郷を意味する「在所」を初めて自身の作品で使用したのは、2010年の『失くした季節』に収められている作品「空隙」と「帰郷」においてであった。しかし、金時鐘は、それ以前にも2004年に尹東柱(1917~1945)の翻訳詩集『空と風と星と詩』の「白い影」という作品において、「在所」という言葉を使用している。「白い影」における「在所」が登場する該当部分の原文と金時鐘による日本語訳は以下(表2)の通りである。

表2 尹東柱「白い影」『空と風と星と詩』(正音社復刻版)²⁷⁾と金時鐘の翻訳版²⁸⁾

尹東柱「흰 그림자」	金時鐘訳「白い影」
…省略… 괴로워하든 수많은 나를 하나, 둘 <u>체고장</u> 으로 돌려보내면 거리모퉁이 어둠 속으로 소리없이 사라지는 흰 그림자, …省略…	…省略… 悩んできた多くの私を ひとつ, ふたつと <u>己の在所</u> に送り帰せば 街角の暗がりの中へ 音もなく消えてゆく 白い影, …省略…

下線で示したように、尹東柱の原文「체고장(チェコジャン)」を金時鐘は、「己の在所」と

訳出している。韓国の「国立国語院標準語大辞典」によると、「제고장」とは生まれ育った地や幼い頃から住んできた地を意味する²⁹⁾。また、「고장」は、漢字語ではなくハングルのみで表記される固有語であるため、ハングルから漢字にそのまま置き換えることができない。そこで、金時鐘は一人称の所有格を表す「제」を「己の」、「고장」を「在所」と分けて訳出する方法を選択したと考えられる。

それでは、なぜ金時鐘は、「고장」を翻訳する際に、「在所」という言葉を選んだのだろうか。その手がかりとして、尹東柱「白い影」の中で「제고장」がどのように描かれているのかについて考えてみよう。「白い影」には、植民地期に東京に留学していた尹東柱本人の分身と捉えることができる「悩んで」いる「私」を「제고장」に送ることによって「白い影」が浄化し、「私」は部屋で羊が草を食べるように学問に励むという内容が描かれている。したがって、ここで表される「제고장」とは、「私」の魂を浄化してくれる理念的な「場所」、あるいは「空間」であると読み取ることができる。「私」を尹東柱と考えるならば、東京にいる彼自身からは遠く離れている、生まれ育った間島の故郷と推測できる。

金時鐘は、尹東柱の作品の「제고장」を「己の在所」と翻訳したことを皮切りに、「白い影」以外にも故郷を表す朝鮮語の固有語の「고장」を「在所」に訳している。まず、金素雲（1907～1981）によって日本語訳された朝鮮の詩選集である『朝鮮詩集』（1954）³⁰⁾を金時鐘が改めて朝鮮語から日本語へと翻訳した『再訳 朝鮮詩集』（2007）³¹⁾があげられる。その中に収録されている李陸史の作品「青葡萄」の原文に出てくる「내 고장」を「わが在所」と訳した³²⁾。次に、金時鐘の回顧録である『朝鮮と日本に生きる』（2015）において、植民地解放後に、金時鐘が失われた朝鮮人としてのアイデンティティを取り戻すために、「自分の「在所」を探さねば」と考え³³⁾、「自分の在所探し」運動を行ったと述べたことがあげられる³⁴⁾。ルビで記載されている「チェコジャンチャッキ」をハングルに起こすと、「제고장 찾기」と表すことができ、ここでもやはり、金時鐘は「제고장」を「自分の在所」と置き換えている。

以上のことから、「고장」には、日本の植民地によって損なわれ、失われた故郷、または本来あるべきであり、本来自分がそこにいるべき場所と読み取れる。その「고장」を、金時鐘は日本語の「在所」と訳した。言い換えると、金時鐘の「在所」という言葉の背後には、「고장」という朝鮮語の存在があるということである。このことは、金時鐘が朝鮮語をもって、故郷表象の幅を、つまりは日本語の幅を広げることを可能にさせた一つの例と考えられる。

それでは、この「在所」という言葉を、金時鐘は最新作である「献詩」において、どのように描いたのだろうか。次に、「献詩」における「在所」の描かれ方を検討し、「在所」という故郷表象にあらわれる金時鐘の故郷観がいかなるものであるか考えてみる。

2 「献詩」と「チノギの船 果てる在日（5）」における「在所」の描かれ方

（1）「献詩」と金時鐘『猪飼野詩集』（1978）の関係

「献詩」において「在所」という言葉は、第3連の「生理の言語」を説明する文脈の中で登場する。そこには、「在所でなじんだ風俗」がそのまま「猪飼野」でも再現され、在日朝鮮人の人々の間に「生理の言語」として受け継がれていることが書かれている。「献詩」には、全体を貫くテーマとして「運河」が存在し、「運河」は、「在所」と密接な関わりを持つと描かれている。第1

連には、「どこでどう河口が会える海なのかは誰も知らず／けんめいに集落が水路のへりでひしめいていたのだ」という描写があるように、「運河」は実際に存在する「猪飼野」の朝鮮人集落を縦断する平野川がモデルになっていると考えられる。平野川は、金時鐘が1978年に発刊した1970年代当時の「猪飼野」で生活する在日朝鮮人について描いた『猪飼野詩集』の主要なテーマの一つでもあるのだ。

近年発刊された『金時鐘コレクション』に収録されている2018年に実施されたインタビュー「＜インタビュー＞在日朝鮮人の源流―『猪飼野詩集』をめぐる」³⁵⁾で、金時鐘は『猪飼野詩集』を創作した背景や思いについて語っている。そこで金時鐘は、『猪飼野詩集』を長篇詩として構想していたこと、『猪飼野詩集』のもととなる作品を、在日朝鮮人による季刊誌『季刊三千里』(三千里社)に掲載していた最中に、編集委員との問題があり打ち切りになったことについて言及している³⁶⁾。続いて金時鐘は、「猪飼野」にはいつか「猪飼野」から出たいと思いながらもそこで生活を終える在日朝鮮人が多くいたと述べ³⁷⁾、「猪飼野」に隣接している平野川を例にあげながら以下のように言及している。

猪飼野に住んでる人たちにとっては運河だけど、流れた先は海のはずなんだよね。そのドブ河を正式には平野運河と言うんだ。その流れた先を猪飼野の人たち、おっちゃんら、おばちゃんらは見たことがないの。それでいながら、いつかここを抜け出て、猪飼野を抜け出て、連絡船に乗って国に帰るというふうに、その夢を持っておるんや。そこに幻の船、進水できなかった船がいつも浮かんでいるという、そのことをずっと書きたかった。それが一〇回の連載で終わっちゃった³⁸⁾。

金時鐘は、『猪飼野詩集』の最後に、「平野運河」から「海」に出て行き、それぞれの「国」に帰るという物語を描きたかったが、『季刊三千里』への投稿が打ち切りになったことにより、果たすことができなかったと回想している。その後も継続して作品を書くことができたなら、「幻の船」や「進水できなかった船」³⁹⁾が実際に「猪飼野」を抜け出す内容を書きたかったと述べた⁴⁰⁾。そして時を経て、2022年に金時鐘は「献詩」において、「水路」の「流れは広がる海に至るものだ」と書いていることから、「平野運河」から「海」に出て「国」に帰ることを夢みた過去の人々の思いが込められていると解釈できる。金時鐘にとって、この「国」こそが本来いるべきはずであった「在所」なのである。このように、「献詩」と『猪飼野詩集』にみられる「猪飼野」の「運河」を渡った先にある「在所」という構図は、44年経ってもなお引き継がれ、故郷を表現する際の主要なテーマといえる。

(2) 『猪飼野詩集』の未刊詩「チノギの船 果てる在日(5)」と「在所」

「猪飼野」にある平野運河が「国」、故郷に繋がっているという在日朝鮮人の人々の故郷観があらわれている作品として、「チノギの船 果てる在日(5)」(以下、「チノギの船」)があげられる。「チノギの船」は、『猪飼野詩集』の未刊詩篇として『金時鐘コレクション』第Ⅳ巻に収録されている⁴¹⁾。「チノギの船」では、朝鮮半島出身の「男」が徴用された後に、「猪飼野」で30年間「もやし用の大豆を選り分け」ることで生計を立てながら、「船」で「海」に出ることを

夢見た先の行く末について描いている。次の引用は、作品の終盤部分である。

行き着けなくて／萎^なえる男の／描きあげた／船が消せない。／その夫の／チノギが行ってしまっただの。／翻然と／路地の騒音に／海鳴りをかぶせ／異郷でしなびた／生涯乗けて出ていったのだ。／船底には／大まさかりの鉦りまで／転覆防止にしつらえてある／紋様を符したチノギの船だ。／とうの昔に放たれていた／願いのなかの／禱りの船だ。／だれもみな／気が狂れたとは思いやしない。／だれもが猪飼野で／行き止まっているから／狂うほどの／チノギの正気を／だれもが心の底で悲しんだのだ。／いまに運河が満ちるとき／チノギの船がやってくる。／流れを逆さに上がってくる。／

(筆者追記：1行1段下がる) わたしをつれてよ／わたしをつれてよ／チノギの船よ／わたしをつれてよ／見えない月でも／汐は満ちるよ／風がでたから／帆げたが鳴るよ／チノギの船だよ／わたしをつれてよ⁴²⁾

上の引用からも分かるように、「チノギが行ってしまったのだ」を機に、場面は「猪飼野」で生活していた「男」の結末へと移っていく。この「チノギ」とは何を指し、「チノギ」はどこに行ったのだろうか。

作中の「チノギ」を指すものとしては、2通りの解釈が可能である。なぜなら、「チノギ」はカタカナ表記されており、朝鮮語が原型にあることが推測できるため、原文の複数の可能性を推測できるからである⁴³⁾。1つ目の解釈は、登場人物である「男」の名前である。この場合、「チノギの船」とは、「チノギ」が持っている「船」と読むことができる。浅見洋子も、「チノギ」を「男」の名前と理解している⁴⁴⁾。また、浅見も言及するように、「チノギの船」という作品は、実際の金時鐘の知人「申というおっさん」の実話をもとに書かれている⁴⁵⁾。その実話とは、「申というおっさん」が故郷に帰るための「船」を実際に作ろうと試みたものの失敗し、結局は「猪飼野」に留まったという話である。しかし、作品では、「チノギ」が出て行ってしまった後に、「猪飼野」に留まるという描写は見当たらない。残された「猪飼野」に住む人々が行ってしまった「狂うほどの／チノギの正気」に対して同情したということが描かれているだけである。つまり「チノギの船」において、「男」は「猪飼野」からで出て行ったままの状態であると読めるのである。

2つ目の解釈として、「지노귀 (チノギ)」を指しているとも考えることもできる。『韓国民俗大百科事典』によると、「지노귀」とは、ソウル地域で行われる亡くなった者に捧げる巫祭、巫俗儀礼である「굿 (クッ)」である「지노귀굿 (チノギクッ)」を意味する⁴⁶⁾。また、崔吉城によると「지노귀굿」の「지노귀」は、「지노귀 (指路鬼)」や「진혼 (鎮魂)」などと表記され、前者は死霊の行く道を意味し、後者は死霊を鎮圧することを意味する⁴⁷⁾。このことから、作中の「チノギ」を「진혼귀 (鎮魂鬼)」や「지노귀 (指路鬼)」と解釈する場合、「チノギの船」は、亡くなった者を弔うための巫俗儀礼と関連があるものと解釈することができる。

これに関連して、『猪飼野詩集』が書かれた1970年代当時、現在のJR西日本大阪環状線桜ノ宮駅西側の河川敷に、済州島出身の女性が「굿」を行う「龍王宮」と呼ばれる空間があったことを考慮する必要がある。龍王宮は1963～1967年にでき、1970年代後半に最盛期を迎えた⁴⁸⁾。塚崎昌之によると、龍王宮が河川敷にできた理由として、済州島では先祖は海にいると考えら

れており、殊に海女の間では海に対する信仰は厚いものがあった点、済州島の海辺の堂(タン)に通じるものを感じ取った点、水を通して故郷の済州島につながっている点等を指摘している⁴⁹⁾。ここからも、済州島出身者が多くを占める「猪飼野」の在日朝鮮人にとって、水や川を通して「済州島」に繋がると信じられていたことが伺え、金時鐘が「チノギ」に鎮魂という意味合いを含ませていたという可能性をみてとることができる。その場合、「チノギの船」は、「猪飼野」に住む在日朝鮮人の魂を鎮めるための「船」とも解釈でき、「チノギが行ってしまった」という表現は、「男」の魂を乗せた「船」が行ってしまったと読むことが可能である。

以上のことから、「チノギ」には、「男」の名前と、鎮魂という二つの意味が重ね合わせられている可能性があることが確認できる。そうすると、「チノギ」の行き先が浮かび上がってくる。「チノギ」の行き先とは、本来自分がそこにいるべきであり、帰るべき故郷であると考えられる。しかし、在日朝鮮人の人々にとって、故郷に帰るという願いを叶えることは難しかった。「チノギの船」の作品の最後には、「猪飼野」に暮らす在日朝鮮人の人々の声と思われる「わたしをつれてよ」というフレーズがリフレインされ、人々が「チノギの船」を待ち侘びているところで作品は締め括られている。このように、物理的に故郷に帰れなかった在日朝鮮人の人々の心情を金時鐘は読み取り、「男」すなわち「申というおっさん」の魂だけでも「チノギの船」に乗って「運河」から「海」を渡り故郷に帰るという物語を構想したと考えられる。この場合の故郷が、まさに魂が帰る場所である「제고장」、すなわち「己の在所」なのである。

(3) 「チノギの船」と「献詩」からみる故郷観 — 「猪飼野」から「在所」へ

1970年代に発表された「チノギの船」と2022年に発表された「献詩」には、「運河」を通して「猪飼野」から「在所」へと繋がるという共通する故郷観を読み取ることができた。しかし、この二つの作品からは、「猪飼野」から「在所」へと導いてくれるはずの「運河」に対する概念の変化も見受けられる。「チノギの船」において、「運河」は「さえぎられたもののなかに」⁵⁰⁾あり、「せり上がったまま／目のすぐ まんまえで／切り絶って」⁵¹⁾る存在、つまり故郷と「猪飼野」を隔てる壁として描かれている。

その一方で、「献詩」においては、「水路」の「流れは広がる海に至るものだ」と「水路」が「海」に通ずることを断言している。この部分は、下水のような「運河」から「海」、そして故郷にたどり着けなかった過去の在日朝鮮人の人々の思いを示唆するものである。つまり、「進水できなかった」「チノギの船」、「幻の船」、「連絡船」が、いずれは「海」に通じて「在所」に進んでいくという希望の意味が込められているのである。在日朝鮮人の人々がそれらの「船」に乗り、「在所」へ帰る時、「運河」はもはや故郷を「さえぎる」ものではなく、「在所」に導く道筋となり、人々は「船」に乗って「在所」へと帰っていくのである。金時鐘は、このような在日朝鮮人たちの理念的な「在所」への帰還を文学の想像力をもって表現したといえるのである。

V おわりに

本稿では、金時鐘の「献詩」に書かれている「生理の言語」と「在所」をとりあげ、『猪飼野詩集』の未刊詩「チノギの船」とあわせて読むことによって彼の言語と故郷の関係を明らかに

した。最後に、金時鐘は、なぜ「言語」とは言いきれない「物言わぬ生理の言語」について言及し、その際に故郷を表す「在所」とのつながりについて述べたのかということについて考えたい。

「生理の言語」と「在所」に共通しているのは、不定形であり、理念的である点である。「生理の言語」と言ってもはっきりとした定義があるのでなく、教わって習得できる言語でもない。「在所」の場合も、どこかはっきりとした物理的な場所や空間を指すのではなく、目の前には見えない理念的な故郷という意味合いを持つものであった。このように、「生理の言語」と「在所」は、一般的に考えられるあらかじめルールや規定が定められている言語やある特定の場所や物理的な意味を持つ故郷とは相反する概念であるといえる。例えば、「生理の言語」の対極にあるものとして、朝鮮語、韓国語、日本語のような国家の枠組の中で創り上げられた言語があげられる。また「在所」の対極にあるものとしては、韓国、共和国、日本等の政治的な領域、またある特定の国家に属する場所があげられるだろう。このように考えると、金時鐘が「生理の言語」や「在所」という概念を作り上げる過程には、一方的に決められた言語、または故郷からはみ出し、逸脱を試みる意図を汲み取ることができる。「生理の言語」は、日本語でも朝鮮語でもない言語として成立させることを可能にさせる。同じように、「在所」もある特定の「地域」や「国家」の縛りからある程度自由である。特に金時鐘のような在日朝鮮人一世の人々に故郷、「国」を問う場合、朝鮮半島の「南」か「北」かの選択を強いられることが多い状況において、「在所」とは、朝鮮半島の南北分断をも乗り越える故郷、つまり自分が帰るべき場所、自分がいるべき場所と解釈できるため、政治的ジレンマを乗り越えることができる故郷表現といえるのである。

金時鐘は、在日朝鮮人一世という観点から、規定のもののどちらにも属さないという曖昧さを持つ自身の立ち位置を「生理の言語」と「在所」という言葉であらわした。これらの表現は、金時鐘が日本語という範疇の中で、規定の概念を打ち壊そうと試み、練り上げてきた文学表現の結果物なのである。

(付記) 本稿は、JSPS 科研費（特別研究員奨励費 20J13971）の成果の一部である。また、本稿は、2022 年 7 月 6 日に立命館大学で開催された「ドクター・ポストドクターワークショップ 日本語から世界文学を考える」での発表「金時鐘の「生理の言語」と「在所」をもとに加筆・修正したものである。

注

- 1) 本稿では、朝鮮半島にルーツを持ちながらも日本で生活している者を「在日朝鮮人」と称し、「在日朝鮮人」によって書かれた文学を「在日朝鮮人文学」とする。
- 2) 金時鐘（1929～）は在日朝鮮人一世であり、日本語で文学活動を行っている詩人である。彼は、植民地朝鮮の下に生まれ育ったが、日本の教育を受けたことから、日本語は彼の意識を支配する言語となった。朝鮮の植民地解放後、金時鐘は、1948 年に起こった済州 4・3 事件（以下、済州 4・3）に関わったことが原因で、1949 年 6 月に済州島から渡日した。その後、彼は日本語で書く在日朝鮮人一世の詩人として文学活動を始めた。金時鐘は、現在に至るまで 9 つの詩集、『地平線』（デンダレ発行所、1955）、『日本風土記』（國文社、1957）、『新潟』（構造社、1970）、『猪飼野詩集』（東京新聞出版局、1978）、『光州詩片』（福武書店、1983）、『化石の夏』（海風社、1998）、『失くした季節』（藤原書店、2010）、『背中

の地図』(河出書房新社, 2018), 『日本風土記』(藤原書店, 2022) を発表している。

- 3) 金時鐘『猪飼野詩集』東京新聞出版局, 1978 年
- 4) 金時鐘『「在日」のはざままで』立風書房, 1986 年, 445 頁
- 5) 中川成美, 西成彦編「対談「旅する日本語」の射程と可能性」『旅する日本語』松籟社, 7 頁
- 6) 例えば, 呉世宗は, 金時鐘の使用する言語観を「短歌的抒情の否定」を行うことによって作り出されるものであるということを指摘している(呉世宗『リズムと抒情の詩: 金時鐘「長篇詩集新潟」の詩的言語を中心に』藤原書店, 2010 年)。
- 7) 組織下における金時鐘の文学活動の概要については, 『『ゼンダレ・カリオン』解説・鼎談・総目次・索引』(不二出版, 2008 年) を参照。
- 8) 金時鐘「盲と蛇の押問等－意識の定型化と詩を中心に」復刻版『ゼンダレ』18 号, 不二出版, 2008 年, 2－8 頁(原本は, 『ゼンダレ』18 号, 朝鮮詩人集団, 1957 年 7 月 5 日, 2－8 頁)
- 9) 同上, 2 頁
- 10) 同上
- 11) 金時鐘『朝鮮と日本に生きる－済州島から猪飼野へ』岩波書店, 2015 年, 254 頁
- 12) 「恨」とは韓国において「한」といい, 単に日本語における単なる「恨む」の意味とは少し異なり, 「恨む」の意味に留まらず, 心に抱いているやりきれない気持ちや悲しい気持ち, その対象に執着する気持ち等, 様々な感情が入り混じった意味を持つ。
- 13) 金石範, 金時鐘著, 文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか: 済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社, 2001 年, 152 頁
- 14) 浅見洋子, 2012 年度大阪府立大学博士学位論文『金時鐘の言葉と思想: 注釈的読解の試み』大阪府立大学, 346 頁
- 15) 「クレメンタインの歌」とは, もとはアメリカ合衆国の民謡であり, 父親がいなくなってしまった娘を呼びかける歌である。金時鐘が言及する「クレメンタインの歌」は, 歌詞が朝鮮語で内容も違うものである(金時鐘『「在日」のはざままで』立風書房, 1986 年, 25-27 頁)。
- 16) 金時鐘, 前掲『「在日」のはざままで』26 頁
- 17) 細見和之『ディアスポラを生きる詩人金時鐘』岩波書店, 2011 年, 8 頁
- 18) 同上, 同頁
- 19) 金時鐘, 前掲『「在日」のはざままで』445 頁
- 20) 元秀一「あとがき」『猪飼野物語』1987 年, 草風館, 244 頁
- 21) 金時鐘「こぼれた話」『草むらの時』海風社, 1997 年, 338-339 頁
- 22) 金時鐘は, エッセーの中で「朝鮮人には漬物といえば, 「キムチ」の味覚が働き, 祭といえば, 日本では異風景のはずのチェサ(祭祀)＝儒教にのっとった法事や季節祭＝がすっかりなじんだ習わしとなる」と述べている(金時鐘「世代に光を」前掲『「在日」のはざままで』447 頁)。
- 23) 「特集ワイド: 93 歳金時鐘さん 大阪コリアタウンに献詩 異郷の在日, 共生の本流願い 文化耕した知恵, 先人への敬慕」『毎日新聞』夕刊, 2022 年 5 月 13 日夕刊 2 頁
- 24) 同上
- 25) 同上
- 26) 金時鐘「年譜」『朝鮮と日本に生きる－済州島から猪飼野へ』岩波書店, 2015 年
- 27) 윤동주『하늘과 바람과 별과 시 (1955 년 증보판)』소와다리, 2016 (尹東柱「空と風と星と詩 (1955 年増補版)」ソワダリ, 2016 年)
- 28) 金時鐘『空と風と星と詩: 尹東柱詩集』, もず工房, 2004 年
- 29) 『小学館韓日辞典』(小学館, 2018 年)によると, 「고장」とは, ①(人が住む)一定の土地, 地方, 地元, ②出身地, ふるさと, 故郷, ③本場, 産地を意味する。
- 30) 金素雲は 1940 年に『朝鮮詩集』の前身となる日本語訳の朝鮮詩集である『乳色の雲』(河出書房)を

発表した。これは当時の日本文壇から高い評価を受け、その後、何度か金素雲の手により版を重ねて出版され、最終的に、訂正を加えた文庫本として発表されたのが1954年の『朝鮮詩集』（岩波書店）である。

- 31) 金時鐘『再訳 朝鮮詩集』岩波書店、2007年
- 32) 金素雲は、同作品の同箇所を「わがふるさと」と翻訳した（金素雲訳編『朝鮮詩集』岩波書店、1954年初版、2010年第12刷、189頁）。
- 33) 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』95頁
- 34) 同上、87頁
- 35) 「〈インタビュー〉在日朝鮮人の源流—『猪飼野詩集』をめぐって」『金時鐘コレクション「猪飼野」を生きるひとびと』第Ⅳ巻、藤原書店、2019年7月、368-399頁
- 36) 同上、372-374頁。金時鐘は、『季刊三千里』の創刊号（1975年2月）から第10号（1977年2月）において『猪飼野詩集』のもととなる作品を発表した。
- 37) 同上、375頁
- 38) 同上、378頁
- 39) 「これらの「船」は、同時代で起こっていた「帰国運動」において新潟から共和国へと出航する「帰国船」と対なるものとして表象されていると考えられる。「帰国船」と金時鐘が描く猪飼野から「国」へ出航する「船」の関係性については、別の機会に論じたい。
- 40) 同上、379頁
- 41) 金時鐘『金時鐘コレクション「猪飼野」を生きるひとびと』第Ⅳ巻、藤原書店、2019年、272-280頁
- 42) 同上、277-280頁
- 43) 金時鐘は、作品の中で度々朝鮮語をカタカタ表記で示している。『猪飼野詩集』においては、朝鮮語のカタカタ表記は、本文以外にもルビで表記されることも多々見受けられる『猪飼野詩集』におけるカタカナ表記の例をあげると、以下の通りである。括弧の中はルビ表記を指す。固有名詞としては、イカイノ、万景峰（マンボンギョン）、チマチョゴリ、錦繡山（クムスサーン）、鎮海（チネ）周衣（トンマルギ）などがあげられる。その他にも、死（チュグム）、祭需（チェス）、日本暮らし（イルボンサリ）のように、の在日朝鮮人の間で使われている単語の使い回しもカタカタ表記で表している。
- 44) 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想：注釈的読解の試み』335～336頁
- 45) 同上、337頁
- 46) 「한국민속대백과사전（韓国民俗大百科事典）」<https://folkency.nfm.go.kr/kr/topic/detail/2858>、最終閲覧日：2022年7月24日。
- 47) 崔吉城『韓国のシャーマニズム—社会人類学的研究』弘文堂、1984年、344頁
- 48) 塚崎昌之「在日一世女性の祈りの場所・龍王宮をめぐる歴史」『こりあんコミュニティ研究会「龍王宮」の記憶を記録するプロジェクト』こりあんコミュニティ研究会、2011年、47頁-50頁
- 49) 同上、48頁
- 50) 金時鐘、前掲「チノギの船 果てる在日（5）」274-275頁
- 51) 同上、275頁